

◆ 品川都税事務所長賞 ◆

「税から見える意識と未来」

品川区立八潮学園 第九学年 長谷部 幸代

『税』と『民主主義』。租税教室を受ける前の私は、この二つを結びつけて考えたことがなかった。税が私たちの暮らしに深く関わっているというのは、まだわかる。しかし、それが民主主義という『身近ではないもの』につながってくるというのは、一体どういうことなのか。はじめは首を傾げた。

しかし、その認識は程なくして改められることとなる。税の集め方は法律に基づくし、どんな政治がなされるのかを左右するのは税の使い道である。そして、その両方の決定には、民衆が選挙で選んだ議員が関与するのだ。税と民主主義は、とても密接な関係にある。

これは、よくよく考えれば至極当然である。それではなぜ、私はすぐに腑落ちなかったのか。それは、一重に『意識』が足りなかったからだ。税を通して、国の営みの一部を担っているという意識である。納税という表に見える行為にしか目がいかず、その向こう側を考えることをしなかったのだ。

他の人々はどうなのだろうか。例えば、全国民に「増税は嬉しいか？」という簡潔な質問を投げかけたとする。きっと、ほとんどの人は「NO」と即答するだろう。家計の支出が増えてしまうので、当然である。しかし、その中で納税の先を見据えている人は、果たしてどれくらいいるのだろうか。ただ単に納める金額の増加だけを見て「NO」と言うのか。それとも、その増えた分が何にどのように使われるのかを知ろうとした上で「NO」と言うのか。前者と後者と、見える景色は随分違ってくると思う。

私たちは、もっと税について知るべきである。税を通して国とつながり、社会全体とつながっていることに気づくべきである。それは必然的に、ひとりひとりが政治を自分事として捉えることにつながる。身近でないということはない。他でもない自分が納める税金が、その一翼を担っているのだから。

自分が納める税の行き先をほんの少しでも『意識』するだけで、今まで見えなかったことがきっと見えてくる。ひとりひとりがその視点を持たなければ、よりよい未来へと確実に近づいていけるはずだ。

難しいことはない。入り口は、私たちの生活の中に溢れているのだ。買い物で消費税を支払う時、少しだけ考えるだけでいい。税によって社会が支えられていることを。そして、私たちはその中で共に生きる仲間だということ。